

大杉谷国有林からの手紙

20通目 ~シカの連携捕獲が始まりました~

8月となり、季節は、まさに大暑の大雨時行（たいうときどきにふる）です。

雨は、私達に多くの恵みをもたらしますが、過ぎたるは及ばざるがごとし、降りすぎないことを祈っています。

さて、11日の「山の日」、皆さんは、どの山に行きますか？

私にとって、山は心のふるさと、日々の生活で疲れた心を癒やしてもらい、やる気、活力をもらってきます。

20通目となる今回は、「大台ヶ原・大杉谷におけるニホンジカ連携捕獲の試行」について、ご紹介します。



6月30日の協定調印式

大台ヶ原・大杉谷国有林地帯は、近畿地方では希少なモミやトウヒなどの亜高山性針葉樹やブナなどの冷温帯性広葉樹がまとまって分布する地域です。

このため、吉野熊野国立公園、国指定大台山系鳥獣保護区、大杉谷森林生態系保護地域などに指定されています。

一方、近年、シカの急激な増加に伴う森林生態系への被害が深刻になっており、シカの生息密度を減らすためには、行政界を移動するシカの行動域を踏まえた環境省、上北山村、国有林の連携による総合的な個体数調整対策の実施が喫緊の課題となってきました。

このため、3者で「大台ヶ原・大杉谷におけるニホンジカ連携個体数調整に関する協定を平成29年6月30日に締結し、連携捕獲を試行的に実施することになりました。



捕獲を実施する尾鷲辻付近の森

大台ヶ原・大杉谷におけるシカの捕獲については、環境省が平成14年度から奈良県の大台ヶ原の環境省所管の国有地で、林野庁が平成26年度から隣接する三重県の大杉谷国有林で開始しています。一連の対策によって、両地域でのシカの生息数は減ってきているものの、その後の調査で、捕獲の対象外だった尾鷲辻から堂倉山までの県境部の上北山村村有林や国有林でシカの生息数が増加していることが明らかになってきました。

一方、同地域でのシカの捕獲については、これまでも、何度か提案され、検討されてきましたが、ツキノワグマや特別天然記念物のカモシカが生息していること、ビジターセンターから徒歩で約1時間かかること、捕獲個体の搬出・処理が難しいことなど多くの課題があり、なかなか実現には至りませんでした。

このため、環境省、上北山村、三重森林管理署では、昨年の秋から打合せを開始し、本年5月の現地検討会を経て、連携捕獲の試行となりました。

捕獲に当たっては、ツキノワグマの錯誤捕獲が少ないと言われる首輪式わな（首用くくりわな）を採用するとともに、隣接する村有林での捕獲と時期、場所の連携を密にすることとしました。

この首輪式わな（首用くくりわな）は、バケツ型のわなの中に、ヘイキューブと呼ばれる干し草を固めた餌を入れて、シカを誘引・捕獲するものです。

なお、連携捕獲のうち三重署分については、7月13日～8月31日までの期間中に、7基以上の首輪式わな（首用くくりわな）を設置し、30日間で200わな日以上稼働させ、20頭以上の捕獲を目標としています。

捕獲個体の処理については、現地での埋設処理は、土壌が浅いことや機械の搬入が困難なことから、他の動物が掘り起こさないような深い穴を掘ることはできません。このため、不整地運搬車を使って、ビジターセンターまで搬出し、そこから車で上北山村の埋設箇所まで運搬することとしました。

その際、不整地運搬車による林内の植生や土壌への影響を最小限にするよう、村有林での捕獲と連携したルートを設定するなどの工夫をしています。

今回の連携捕獲を成功させ、大杉谷の豊かな自然を守るためには、関係機関との連携を密にし、多くの皆さんの意見を取り入れ、より良い対策にしていく必要があります。

このため、7月27日・28日の大台ヶ原自然再生推進委員会の合同現地ワーキンググループに参加するなど、今後とも、積極的に取り組んでいきますので、引き続き、皆さんの応援をよろしくお願いいたします。



3者現地検討会で実施方法・安全対策を検討(5月17日)



首輪式わな(首用くくりわな)の設置状況(7月27日撮影)

(発行: 三重森林管理署 尾鷲森林事務所 地域統括森林官)